

第4回市民活動支援センターのあり方検討委員会 会議概要（会議録）

平成29年10月18日（水）13時～

茂原市役所5階505会議室

1. 開会
2. 茂原市ボランティアセンター（茂原市社会福祉協議会）との連携
牧野昌子氏（特定非営利活動法人（認定 NPO 法人）ちば市民活動・市民事業サポートクラブ代表）からの助言
3. その他

開会	（事務局 風戸）
あいさつ	（岡本市民部次長兼生活課長）
これまでの ふりかえり	（事務局 風戸）第2回検討委員会（ロールプレイワークショップ）で出された主な意見、第3回検討委員会（先進地視察）で出された主な感想について紹介。 県内の市民活動支援センター、ボランティアセンターの設置状況について説明。
ボランティ アセンター について	（茂原市社会福祉協議会地域福祉課 岩村副主査） 別紙のとおり
アドバイザ ーからの助 言	（認定非営利活動法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ代表 牧野昌子氏） 別紙のとおり
ワークショ ップ	テーマ「（仮称）市民活動フェスタ／まちづくりフェア 市民活動支援センター1dayオープン 仮想企画会議」 ・フィッシュボウル形式での意見交換

ボランティアセンターについて

茂原市社会福祉協議会地域福祉課 岩村副主査

茂原市ボランティアセンターの運営状況：

コーディネーター 2名

登録団体数 63団体

会員数 1,000名以上

平成28年度の相談件数 136件

平成28年度予算額1,883千円

ボランティアセンターの役割と機能：

登録と保険、学習、連絡調整、団体支援、情報提供、ボランティア相談

実際のボランティアの様子、相談事例紹介

【主な質疑応答】

Q.ボランティアセンター登録団体にナルク茂原が入っているものと考えていたが、入っていないのはなぜか。また、ボランティア連絡協議会にも参加させていただきたい。

A.以前、登録されたのであれば、掲載されていると思うので、確認させていただきたい。

Q.柏市に伺った際に、市と社会福祉協議会がそれぞれセンターを設置していたが、社会福祉協議会では、市全体の地図に、どこで何の活動をしているのかを付せんで貼っていた。そのような情報発信が必要であると思う。また、小学生に対してボランティア教育をしていることは素晴らしいと思う。私が取り組んでいる環境関係のボランティアは、市の生涯学習課が担当している「もばら学」という枠の中で、環境保全課と一緒に取り組んでいる。話を聞いていて、今後、市民活動支援センターとボランティアセンターが連携していくという話があったが、すでにコラボできる部分があるのだから、「もばら学」と連携してはどうか。

A.現状で、生涯学習課と社会福祉協議会がコラボすることについては、特に支障はない。福祉教育については、学校からの依頼に基づいて講師を派遣しているが、依頼件数は決して多くはないのが実情である。平成28年度は、6校で実施した。子ど

もたちに、福祉に対する意識を持ってもらうことは、とても大切なことであると思うので、毎年、校長会等に出向いて、少しでも福祉教育を依頼していただけるようお願いしているところである。最初にお話しいただいた、市内のどこでどんな活動をしているかという把握については、とても重要なことであり、コーディネーターとしては、そこが最も大切であると思う。地域にある社会資源の把握については、あまりできていないのが実情であるが、市内の各地域にどのようなものがあるのか把握することによって、登録団体で対応できないものであっても、社会資源の活用によって対応することができることもあると思う。その情報発信まで至っていないが、社会資源の把握については、今後も取り組んでまいりたい。

Q.団体で登録したいという人たちには対応していると思うが、個人で登録したいという人に対しては、いろいろな団体を紹介するということになるのか。

A.団体を紹介する場合もあるし、個人で活動できるような場所を紹介することもある。

Q.茂原市のボランティアセンターは、茂原市在住の方のみが対象なのか。私も市内の団体に入っているが、その団体では、人材不足のため、他町村の方でも参加可能としている。

A.四街道市に視察に伺った際に、四街道市役所の齋藤氏が、市外であろうが県外であろうが関係なく、四街道市のためになるのであれば、どんな方でも来ていただきたいと話していて、大変感銘を受けた。私も、その考え方には賛成である。市内在住であるかどうかを問わず、茂原市にとって良い活動であるかどうか重要であると思う。その逆もあり、ボランティアセンターに登録している団体は、毎年登録を更新していただいているが、市内の活動だけか、市外の活動もしているかという聞き取りを行っている。市内の団体の活動が広がって、市外でも活動したり、逆に市外の方が茂原市内で活動したりすることもある。先ほどご紹介した夏の体験ボランティアについても、案内は市内だけに限らず、県内の福祉系の大学や専門学校にもパンフレットを送っている。今年は、最も遠い人で、埼玉県の子供さんが茂原市に活動しに来てくれた。福祉を志す人が、市外であっても茂原市のために何か活動したいということであれば、もちろん受け入れを行っている。

Q.団体であれば、活動するにあたって資金や活動場所が必要になると思う。資金の

部分は難しいと思うが、活動のコアとなる拠点が必要であり、そこだけで済めばよいが、一般的に、市内の公の施設は、いろいろな団体がすでに入っていて、キャパシティ的にどこもスペースがないのではないか。その反面、市内の閉店された店舗や居住者がいなくなった空き家などの場所もあるとよく言われる。そのような場所については、どのように紹介しているのか。

A.社会福祉協議会の事務所は総合市民センターになるが、そこには多くの部屋があるので、そちらを使っただく場合もある。また、社会福祉協議会では、市からの指定管理を受けて、総合市民センター以外にも 5 つの福祉センターを運営しているので、福祉センターの部屋を使う場合もある。事務手続きがスムーズになるという意味で、福祉センターを紹介する場合もある。福祉センター以外にも、公民館や東部台文化会館など、いろいろな施設があるので、団体にとって便利な場所で活動していただいている。福祉センターの利用率は、ほぼ満杯というまではいかず、どこの団体も多いところで週 1 回・月 4 回程度であるので、常に埋まっているという状態ではない。団体を結成して活動したいということであれば、まずは総合市民センターを活用していただきたい。

Q.茂原市にはいくつか公民館があるが、公民館と福祉センターでは目的が異なるということは理解している。時代が変わり、住民団体の活動は場所が足りないくらいであるというのが実情である。うまく活動が継続するためには、資金と同様に、活動場所を確保することが重要である。地域ごとに福祉センターがあると、例えば、二宮地区の住民は二宮福祉センターに行く。私は鶴枝地区であるが、鶴枝地区には福祉センターがなく、公民館がある。公民館は、成人の社会教育が主であり、福祉団体がそこで活動することはなかなか難しい。福祉センターには、職員や支援団体がいるが、公民館はそうではない。以前、私が自治会長を務めていたとき、市長や関係者に、公民館の執務室に社会福祉協議会のスタッフが座る椅子を用意してくれと要請したが、できないという結論であった。そうである限り、鶴枝地区の住民は、他の地区の福祉センターに行かなくてはならないのかということになってしまう。建物の名称など関係なしに、福祉センターでやっていることを公民館でも行えるようにしてほしい。これからは、そのようなニーズが増えてくると思う。以前は、できないという結論ではあったが、振り出しに戻して、公民館にも福祉センターのよ

うな機能を持たせてほしいというのが、地元の願いである。ぜひ、社会福祉協議会のスタッフが公民館の現地でサポートするような体制を整えてほしい。

A.地域によって違いがあるのは確かである。以前からご提言いただいていることであるので、今後も検討してまいりたい。

Q.夏のボランティア体験は、年々増えてきているのか。小中学校の頃から積極的にボランティアに参加した方が、将来のためにいいと思うが、例えば、学校教育の中で、ボランティアに参加したことを内申書に書くような状況があるのか。

A.夏ボラは、今年が 512 件、昨年が 505 件であった。その前は、500 件弱であったので、少しずつではあるが、増えてきていると思う。年々、新しいプログラムを追加して、前年度より充実を図るように努めている。最近では、「パラスポーツ茂原」という団体もでき、障害者スポーツにも取り組んでいるので、そのようなところにもボランティアを派遣している。また、図書館にもお願いして、「こども司書体験」というプログラムを今年から始めた。プログラム数を増やすことによって、毎年少しずつ参加者が増えているという状況である。ボランティアが内申点にどう反映しているのかは分からないが、活動していただいた場合、ボランティア活動証明書を発行している。これは、対外的にボランティアをしたことを証明するものであるが、それが何かに役立つときがあるのかもしれない。特に、夏ボラについては、県内の福祉系の学校に案内を出しているので、参加者が増えている。学生さんは、学校の先生から、福祉施設で働き始める前に、ボランティアを利用して、現場の雰囲気を経験してみてはどうかとされているようである。

Q.ある自治体では、教育の一環にボランティアを組み込むことによって、参加者が非常に増えてきたということも聞いている。受け入れる側の問題もあるが、せっかくの機会であるから、小中学生のころからボランティア意識をつけていくことも大事であると思う。

A.学校として、ボランティアの位置づけを考えてくれると、ますます参加者が増えてくると思う。

Q.社会福祉協議会の活動は素晴らしいと思う。そもそも、社会福祉協議会は、高齢者や民生委員・児童委員が対象とするような家庭の支援から出発している。近年でいえば、災害ボランティアも含まれるなど、活動の幅が広がってきている。そのよ

うに考えると、社会福祉協議会が考えている福祉は、生活者を支援する福祉から、環境を良くして間接的な支援を行うように、変わってきていると思う。ボランティア活動のリストにもあるように、非常に多岐にわたっており、その活動は当初の高齢者や民生委員・児童委員が対象とするような家庭だけでなく、健全な一般家庭も対象に含めて活動していくということになってきている。一般市民にしてみれば、自らの生活の充実や楽しみ、現役時代に培った、あるいは自ら学んで獲得した専門性を活かす、いわゆる「自己実現」を望んでおり、社会福祉協議会もそれを支援することになると思う。それは大いに結構であるが、社会福祉協議会と市民活動支援センターがどう折り合いをつけていけばいいのかが分からなくなってしまった。社会福祉協議会には、どんどんやってほしいが、この会議の対象となる市民活動支援センターとは食い合う存在になってしまうのか、あるいは共存していけるのか。社会福祉協議会はどんどん取り組んでいるので、いまさら引っ込みがつかないということもあるかもしれない。我々としては、どう話を広げていくのかが大変難しい問題である。そのような意味で、良い刺激を与えていただいた。

A.今の話にも関連してくるが、この後、NPO クラブの牧野昌子代表から、「中間支援団体の役割」についてのご助言をいただくこととしたい。

中間支援団体について

アドバイザー 認定NPO法人ちば市民活動・市民事業
サポートクラブ代表 牧野 昌子氏
同席 千葉県県民生活・文化課
副主幹 鈴木 敦子氏

(千葉県 市町村と市民活動団体との連携促進事業)

- NPO クラブの事業内容紹介
- ボランティアセンターと市民活動支援センターの連携
 - 相互の役割を理解した上で、強みを活かしあう視点で連携
 - 利用する市民目線での対応、役割分担
- 市民活動団体とボランティアの関係
 - ボランティア…個人
市民活動団体…組織
 - 収益・報酬：ボランティア…原則無報酬
市民活動団体…非営利（収益を上げるが地域に再投資）
 - 目的・参加：ボランティア…自己実現・自己満足 参加する側
市民活動団体…目的達成が第一義 参加を促す側
- 協力・連携の事例
 - とみさと市民活動サポートセンターの場合
 - ◇ 「ちくちくカフェ」…ママの手仕事カフェ、仲間づくり支援
 - ◇ 夏休み小学生ボランティア体験講座
 - ◇ 「居場所づくり講座」、「ちらしづくり講座」
- 協力・連携を進めるのは、市民・利用者のため
 - 市民活動支援センターで受けた相談を、ボランティアセンターにつなぐ
 - 地域づくりに関わる資源（人・もの・情報など）の共有
 - 市民には、市民活動支援センター・ボランティアセンターの両方を便利に使い切ってもらおう
 - 相互に貢献する協力体制 市民、市民活動団体が取り組む地域づくりに役立つプログラム・事業の提供

- なぜ、市民活動団体を支援するのか
 - 市民活動団体…民間で主体的、公益的、比叡率の活動を継続する組織
地域の課題を解決するために、解決行動をする団体
 - 市民活動団体の特徴…機動性（すぐに対応、話が早い）、柔軟性（新しい発想の解決活動、制度の壁がない）
 - 行政、既存の機関だけでは地域の課題解決が進まない。多様な団体と協働することで、課題解決がスピードアップする
- 地域づくり、まちづくりとは？
 - まずは、今ある資源を掘り起こし、活用し、みがき続けることで、地域の課題を解決すること
 - 地域に新しい価値をつくる
 - ◇ 「イイね」をつくる、共感を広げる、裾野を開く
 - ◇ 市民の主体性を集める
 - ◇ より多様な人、多様な団体と協力・連携・協働
- 地域の課題とは？
 - 誰もが知っている課題…人口減、少子高齢化、生産年齢人口の減少、耕作放棄地、空き家、里山の荒廃、公共交通機関の廃止
 - 見えない課題（埋もれている課題）…格差社会、子どもの貧困、若者の非正規雇用、30代・40代の引きこもり、介護者の孤立化
 - この先起こる課題…税収の減少、既存公共施設・インフラの補修・整備費の増大、後期高齢者の増加、社会保障費の増加
- 茂原市の人口…2040年（23年後）には人口20%減少 65歳以上が40%
- 地域の課題解決を進めるには、どんな支援が必要か
 - 課題を見える化・深掘り…調査事業
 - 多くの市民に知らせる…広報事業
 - 解決活動に必要な資源を集め、提供する
 - 解決活動を担う人材を育てる
 - 地域づくり団体のネットワークを編む
 - 市民活動団体の解決力を鍛える

- 市民活動支援センターに求められる機能
 - 1.相談対応力
 - 2.調査・情報収集力
 - 3.情報の編集・発信力
 - 4.コーディネート・ネットワーキング力
 - 5.資源の掘り起こし・提供力
 - 6.人材育成力
 - 7.政策提言力
- 市民活動団体の運営資源
 - ①目的…何をする団体か、解決する課題は何かを明示
 - ②人材…役員、スタッフ、ボランティア、支援者
 - ③情報…情報収集、整理、発信
 - ④ネットワーク…信頼できる分野ごと、地域ごと
 - ⑤資金…自主財源（持ち出し、会費、寄附、事業収益）、他主財源（助成金、補助金、委託金等）

【主な質疑応答】

Q.「人材育成」というのは、活動する側の視点だと思うが、活動したくて相談に来る人、あるいは隠れたニーズがあるのではないかと思う。高齢化社会にあって、必要なのは思いやり、もっと突き詰めて言えば、お互い様ではないかと思う。その根っここのところが、なかなか浸透していない。今まで生きてきた経験の中で、誰かがやってくれると考えている高齢者が多いのではないか。そのような考え方をほどこしていく教育や人材育成が必要だと思う。先ほど、茂原市の高齢化のデータが提示されたが、それを見て、どうするのかということである。「自分たちでやろうよ」ということになって初めて、この話につながると思う。何かいい手法はないか。

A.いま、高齢者の居場所や、子どもたちの居場所である「こども食堂」、ママたちの支援の場所など、「居場所づくり」に取り組んでいる事例が多い。例えば、ママたちの支援の場合は、ママたちだけでやるのではなく、シニア世代がいたほうが良い。そのような現場を考えつくようなものを作っていくことだと思う。「居場所をつくらう」という場合には、それが大事だと思う人がまず集まり、地区ごとに民生委員や

町会長、民生委員などが集まり、地域包括支援センターも加わっている。富里市でも、最初は、川北秀人氏（IIHOE 代表）の「小規模多機能自治」の話聞き、「だったら、私はお茶を入れることができる」とか、「おにぎりをつくることができる」などと広がっていった。そのような人たちを引き出すことが、コーディネーターの役割である。そういう具体的な場面をたくさん作ることが重要だと思う。

Q.千葉市は区制を敷いていると思うが、NPO クラブは区をまたいで活動しているのか。

A.私たち NPO クラブの活動範囲は、千葉県内である。千葉市のサポートセンターを 5 年間務めたこともあるが、現在はやっていない。千葉市の仕事としては、中央区と緑区の補助金の審査選考と、採択された団体のマネジメント研修を実施している。

Q.団体をつくるには、同レベル・同世代の方がつくりやすいと思うが、長い目で見ると、一つ一つの場所に、居場所づくりにしても何にしても、幅広い年齢層がいたほうが良いと思う。確かに、同年齢のほうが集まりやすいことはわかるが、人生の先輩による若い人たちへの支援が、啓発や育成にも繋がってくると思う。なかなかまとまりにくいとは思いますが、団体づくり・組織づくりにはそのような視点があったほうが長期的にはいいのではないか。

A.おっしゃるとおりである。NPO クラブは、もともと中間支援組織であるので、現場を持っていなかったが、検見川のスーパーの跡地を改装して、多世代交流拠点である「おおなみこなみ」を運営している。そこは、単なる居場所ではあるが、赤ちゃん連れから高齢者まで、さまざまな人が集まり、1 杯 200 円でコーヒーを入れたり、地域包括支援センターが 20~30 人の高齢者を集めて「貯筋体操」という運動を行っていたりする。その中で、編み物が上手なおばあちゃんがいて、習いたいママがいて、自発的に編み物教室が 8 人でスタートした。そういう場があれば集まりやすいし、そのような状況を作っておくことが必要だと思う。若い人は若い人だけ、高齢者は高齢者だけということは、決して良いことではない。

Q.最近、受け入れる場を設定して、集めるという感覚ではなく、喫茶店やカフェのようなものをつくるにしても、そのような環境の中に入れるのではなく、逆に自分たちが参加して、自分たちでコーヒーを作って出してあげるという形になってき

ていると思う。場所に集めるのではなく、参加した人が自分たちで作りだして発信していくという形に少しずつ変わってきているのではないか。

A.「おおなみこなみ」も、NPO クラブとしては、花見川区の拠点づくり事業として、区に家賃を出してもらっているが、あとは若い人から 70 代まで 7 名のボランティアが交代で来ている。そこでプログラムをする人たちは、空いているコマを見つけて、赤ちゃん体操や英語のレッスンなど、いろいろな使い方をしている。毎月おたよりをつくって、検見川小学校で全児童 500 人に配るほか、回覧板で検見川町内に回しており、次から次へとプログラムができていく。あとは、「オレンジカフェ」や「認知症カフェ」などもあるが、これを実施して分かったこととして、近所の方はあまり来ず、遠くから車で来る人が多い。知られるのが嫌ということもあるようである。現在、2 組来ているが、囲碁をしている。認知症の方も、囲碁をするときはピシッとするようである。福祉については、よくわからないこともあったが、5 年目になって、現場が分かってきたような段階である。

Q.四街道市と富里市のセンターに伺った後の話であったので、とても分かりやすかった。「見えない課題」や地域のニーズは、今まではアンケートなど、一方的な調べ方であったが、四街道市で特長的であったのは、市民活動支援センターのコーディネーターが、センターが狭いから自分たちで出かけていくというアウトリーチ方式であった。見えない課題、課題は何か、皆さんがどんな思いなのかを聞き取ってきているという話を伺ってきた。いま、茂原市で 100 歳体操をしようとしても、歩いていけるとところに居場所がないという課題がある。そのようなときに、課題を持ち帰って、コーディネーター会議で、行政とコーディネーターがいっしょに課題解決のためにどんな手法がよいか考えているという四街道市の事例が大変参考になった。資金面に問題があれば、行政が補助金を引っ張ってくるなど、そういう積み重ねには、先ほどお話しいただいた 7 つの機能が生きているのだと思った。

A.富里市でもいつも言っているが、相談も掘り起こさないといけない。コーディネーターが窓口にいて、センターで座って待っていても誰も来てくれない。受付だけしてはいけないと常々言っている。

Q.四街道市の特長は、自ら外に出かけていくから、人間関係が構築され、実情を把握でき、どことどこの団体をつなげれば解決に結びつくかということが、コーディネ

ネーター会議で組織的に話し合われ、次の展開に広がっていくということだと思った。市民活動支援センターは、(物理的な)場所があることが必要ではなく、場所がないことによって何ができるかという発想になったということが素晴らしい。私もつい、場所がないからという発想になってしまうが、場所がなかったら何をするのかという知恵が出てきて、だったら外に出ていくしかないという、そこがスタートであったと四街道市の齋藤氏も話していた。外に出ていったことによって、課題が整理され、解決につなげていったということになったのではないかと感じた。

A.富里市でも、コーディネーター会議で、事業の進ちょくや次年度の計画をどうするかなどを喧々諤々話し合っている。とにかく情報を取りに行くことが重要である。富里市は、センター独自のウェブサイトを持っておらず、市役所の中にセンターのサイトがあるが、Facebook はセンターとして投稿できるので、一年中、現場に行つて写真を撮つて、団体の情報をどんどん掲載している。Facebook に登録していなくても、Facebook ページはインターネットがつながっていれば見ることはできる。商工会議所の会議や学校での行事などにも出かけていく。富里市の小中学校に対して、学校だよりを、センターに置きに来ていただくように依頼したところ、教頭先生が会議のついでのときなどに、センターに学校だよりを持ってきてくれるので、そのときに学校の情報を聞くなどしている。座っているだけでは、何も得られないが、来る人来る人に話しかけて、情報を聞いている。富里市は、市役所に隣接しているので、高齢者支援課などの担当課も、よくサポートセンターに顔を出してくれる。商工観光課とは、PR ビデオをいっしょに作っている。そのようなことをどんどんやらないと、センターが何の仕事をしているか分からないということになってしまう。ただ、印刷機や会議室などの場所は必要であると思う。

Q.私は、2年くらい前に「おおなみこなみ」を見学させていただいた。やはり、地域に密着した形でないといけないと思う。私は、千葉市若葉区でコミュニティカフェのお手伝いをしているが、なかなかお客さんが来てくれない。先日も、この検討委員会のロールプレイで話したが、そのコミュニティカフェで、「千葉市いきいき体操」というのを11月第2週くらいから始めることになっている。区役所からは、健康福祉課の方が来て、教えていただいた。要介護になっている人が来た場合は、1人当たり250円あたりの補助金が区から出るということであった。今、人集めをし

ているところだが、認知度が低く、お客さんが来ない。少しずつリピーターが来てくれているが、歩いてこれる人しか来ないのが悩みである。「おおなみこなみ」のように、いろいろな悩みを持った方や特技を持った方など、たくさんの方が来てくれて、輪ができて、グループができてくれれば良いが、なかなかそうはいかないので困っている。何かいい方法はないか。

A.それは常設のものか。

Q.常設だが、週3回、11時から16時までである。全く人が来ない日もある。

A.地域の回覧板で回してもらおうと、効果があるかもしれない。そのときに、市や区、社会福祉協議会の後援を得ておくと、自治会で回覧するときに通りがよい。あとは、友達を連れてきていただくようにするなど。

Q.口コミもなかなかうまくいかない。

A.「おおなみこなみ」も、1年間くらいは大変だったが、3年経ったら浸透してきたように感じた。

Q.小学校への働きかけというのは大事だと感じた。

A.「おおなみこなみ」では、こども食堂も始めたが、学校を通じて各家庭に情報が届くというのは、とてもありがたいことである。

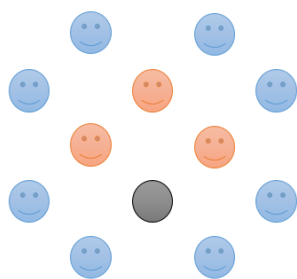
テーマ「(仮称) 市民活動フェスタ/まちづくりフェア 市民活動支援センター
1day オープン 仮想企画会議」

ワークショップ



(仮称)市民活動フェスタ/まちづくりフェア・ 市民活動支援センター1dayオープン 仮想企画会議

- ・ イベント名称
- ・ 日時・場所
- ・ 運営主体
- ・ 事業費
- ・ 実施内容
- ・ 創意工夫
- ・ その他



<フィッシュボウル(Fishbowl)>

1. 最初に対話する人が内側の円(フィッシュボウル)に着席します
2. 外側の人たちは、対話の要点や気づきなどをメモ用紙に書いていきます
3. フィッシュボウルの空席には、外側で話を聞いていて、誰か話したくなった人が挙手し、フィッシュボウルのメンバーが全員手を挙げたら、中に入ることができます。または、内側の人たちが、この人の話を聞きたいという外側の人を指名することもできます。
4. 外側から加わった人が話し終わったら、再びフィッシュボウルの外に戻ります
5. 規定時間が経過したら、ベルが鳴りますので、一斉にメンバーを入れ替えます
6. 全てのセッションが終了したら、隣席の人と聞いたこと、感じたことを交換し合います

第1セッション (10分)

- 市役所の7階以上のフロアからは、富士山が見える。9階のフロアをオープンにして、「市役所の高いところで何かやろう」というようにすると面白いのではないかな。そこで市民活動支援センターの1day オープンをしてみてもどうか。
- 最近は、車で来る人が多い。そういう意味では、市役所は場所的にとてもいいと思う。
- 私も、8階に行ったときに、外の景色を見た。上から眺めることはなかなかないので、陸橋を渡るときなども外を見てしまう。茂原市では、高いところから町を眺める場所があまりない。
- あとは、うまいタイトルをつけなくてはいけない。キャッチフレーズのように。例えば、「富士山を見ながら〇〇しよう」とか。
- 私も、市役所で開催するのはいいと思う。いろいろな用事で市役所に来なくてはならない人がいる。市役所の1階のエントランスにブースを出せば、いろいろな人が触れ合う機会になると思うので、敢えて全く関係のない人が通る場所でやることはいいと思う。

- ロビーコンサートならぬ、ロビーブース。
- どういう目的で、どういうことをやりたいのか。場所を作って、何をしたいのかというアイデアを聞くこともいいと思う。
- 最初は、若干サクラも必要だと思う。
- （外からフィッシュボウルの中に招き入れて）どんなタイトルだったら、来たいと思うか。
- まさか呼び込まれると思わなかったが（笑）。芸術性の高いものとか、茂原の特長を出したようなイベントなどはどうか。あるいは、地域産業を紹介するなど、地域の活性化、地区の特長を表すイベントがあると、茂原の宣伝にもなると思う。
- そうなると、天然ガス。
- 天然ガスのおかげで、地場産業もずいぶん育った。
- 茂原七夕まつりの最後に、「茂原音頭」、「七夕踊り」をやっていて、私も3年連続で出ているが、残念ながら、よさこいと阿波踊りがメインになってしまっていて、七夕踊りが隅っこに追いやられて、ちばテレビも放送してくれない（笑）。私は孤軍奮闘しているような気がする。いつかは、ちばテレビで、七夕踊りがきちんと放送してもらえるように、頑張りたい。
- 特長を打ち出せば、記憶に残ると思う。
- 七夕まつりと言えば、今回、大きな鯛提灯飾りをつくって、市内の小学生3,000人が紙に書いて貼った。あれは、茂原市の大きな売りになると思う。
- 七夕まつりの話が続いて恐縮だが、私は生まれも育ちも茂原市である。60年前の七夕まつりも知っている。昔はすごかったが、現在は目を覆いたくなるような有様である。私としては、茂原愛もある。
- 最近の人たちは、昔の様子を知らないだろうから、それを再現するのもいいと思う。
- 若い人たちに印象を残すということは、とても良い。
- 昌平町の六斎市も、昔は通れないくらいの勢いだった。車を通すようになってから、榎町も昌平町もダメになったと思う。便利になって、かえって不便になった。そのあたりの議論をしたい。

- 昔は、車が通れなかった。今は、対面販売をしている背後を、車がかすめて走り去る。あれでは危ない。別の人に聞いたが、六斎市で大根を買っても、持って帰れない。例えば、茂原高校の生徒が車まで運んであげるなどしてくればよいが。六斎市を買っても、公民館の駐車場まで運ぶのが大変である。車社会にしてしまったために、不便になってしまっていることを掘り起こして、何かできると良いのだが。
- 七夕まつりが衰退したという声は、私の同世代からも聞こえてくる。そういうところをきっかけに、まちづくりに関心を持ってもらうのもよいと思う。「まちづくりについて話し合おう」などという大きなテーマではなく、「もばらの七夕まつりをもう一度盛り上げよう」というテーマに絞って 1 回目を開催すれば、考えてみようかという人も出てくるかもしれない。実際の七夕まつりのイベントのときに、そのような場所があると良い。
- 車の通行についても、七夕まつりのときは難しいが、六斎市のときは近くに停めることができる場所があったり、バスのサービスによって、駐車場が遠く似あっても、バスでそこまで送迎したりすることができるとうよい。
- そのあたりのランドデザインをどうするかが重要である。
- シャトルバスをどうするか、どこに車を止めたらよいかなど。
- 最近では、冬の七夕まつりなども行われている。茂原市は七夕まつりがメインであるという認識がある。

第2セッション（10分）

- 一番関心が高いのは、2025 年で 75 歳以上の人が相当数増えるということと、健康のことだと思う。一つには、「健康寿命を延ばすには」というセミナーを開いてみたいと思っている。
- 前のグループでは、場所を市役所の 9 階でやろうという話であった。9 階と 1 階の吹き抜け、外の市民室まで至る広場など。
- 市民室も良いと思う。
- ボランティアに頼むとすれば、ハーモニカやウクレレ、三味線のグループなど、さまざまな人たちがいる。その方たちに、特別にアトラクションをやっていたかどうかというのも良いのではないか。そういう方が、人が集まるのではないか。

- お金がかからなくてよい（笑）
- どういう人たちに協力してもらえばよいか。
- 高校生など。
- 主催するにあたっては、単独でやるよりも、いろいろな人たちを巻き込んだほうが良いと思う。どういう人を巻き込むほうがよいか。
- （外からフィッシュボウルの中に招き入れて）いろいろな情報を持っていると思うので、ご意見をお聞きしたい。
- 健康寿命を延ばすための講師を招くとしたら、社会福祉協議会でいろいろな情報を持っているのではないか。
- 健康に関するものとしては、まずは、いま市で進めている 100 歳体操をメインで進めて、茂原市で普及させていくということもあると思う。これからますます介護予防にも力を入れていくことになるので、100 歳体操と絡めて、ボランティアセンターの登録団体に、体操だけでなく、子どもからお年寄りまで参加できるようなものを探していただくということもできるのではないか。
- 企業等で、健康についての取り組みをしているところもあるので、呼びかけてもいいのではないか。協賛という形で協力してもらっても良い。健康に関するサンプル商品を提供してもらえる場合もある。
- 伝統ある七夕まつりが、年数を繰り返して同じようなものになってきてしまっているのので、新たにいろいろな人が参加しやすいような取り組みにするのも良いと思う。高齢者だけでなく、子どもなど幅広い人たちに参加を呼び掛けて、ブースをつくれれば、自分たちの活動の宣伝にもなり、次のメンバー獲得にもつながる。利用されていないスペースを使って、内容も工夫すればいいのではないか。
- 現在、社会福祉協議会に登録している団体の皆さんにも声をかけて、アンケートをとり、メンバー数など、いろいろな情報を貼り出すようにしてはどうか。
- 若いうちから、健康に関心を持ってもらうことは重要である。高齢者だけでなく、幅広い世代に対して発信できる。
- 新たなメンバーに団体に入ってもらえるように、勧誘のきっかけになると良い。
- ボランティアが必要だとなったときに、「それならば私たちが手助けできる」と

いうように、そのようなつながりができていくと良いと思う。

- それがまさに「協働事業」である。
- 自分たちだけでは、どうしても閉塞的になってしまう。先ほどカフェの話もあったが、若い人たちにも子連れで来てもらえると良い。
- 社会福祉協議会としては、お金の面ではなかなか協力することができないが、パンフレットの印刷など、事業費をどうするかというのも大きな問題である。七夕まつり実行委員会から補助してもらえたらよいのだが。
- なかなか難しいのではないか。場所的な問題もある。
- 場合によっては、セミナー開催に当たって、資料代程度はいただいても良いと思う。会場を市が提供してくれれば会場費はかからないが、印刷代は必要である。
- せっかくであるので、格好のいいポスターなどを作りたいところである。
- 早めに決めて、広報紙に掲載してもらおうというのも一つの方法である。
- 今は何でも印刷できるが、逆に手書きや手刷りなども、意外ともてはやされる。
- 行政が間に入ってくれば、自治会回覧もできる。自治会長連合会の協賛を得るというのも手である。
- 健康管理課や自治会など、いろいろな人を巻き込んでいかないと、進んでいかないと思う。
- 市内には生涯大学校があり、大人気の「笑いヨガ」というサークルもある。私もやったことがあるが、気が付くと皆さん大爆笑している。あれは素晴らしいと思う。

第3セッション（10分）

- イベントとして思い浮かんだものとして、茂原公園の桜が有名であるから、茂原公園でおじいちゃん・おばあちゃんが赤ちゃんと遊ぶというものが面白いのではないかと思うが、どうか。
- 茂原市の悪いところは、すべてが縦割りであることだと思う。私は、7月7日の七夕の日に、いろいろな自治会やボランティアなどが出会う場として、市役所に来れば何かいいことがある、ほかの組織を知ることができるというようにしてはどうか。

- 七夕の 7 月 7 日なら、覚えやすい。その日に市役所に来れば、いいことがあるということが根付いていくと良い。
- 経験上、場づくりがとても重要であると思う。一度限りのイベントではなく、そこに来て種をもらっていくという体験を重視したい。それを各地域に持ち帰って、水をやって育てていくという知恵を、7 月 7 日に市役所へ来れば何か得られるというようにしたい。人と会えば、絶対に何かが生まれる。家にいると、誰に会えばいいかすらわからない。今日、ここに来て、いろいろな人に会えたことがうれしい。人間は、会ったもの勝ちだと思う。会うということがとても大事である。そういう場を市役所で作っていただきたい。
- 自治会も、なぜ自分たちが他団体のチラシを配らなくてはいけないんだと怒るのではなく、よくぞ良いことをやってくれたという大きな心を持っていただければ、とてもやりやすいのだが、良いことをやっても怒られてしまうのが実情である。
- 市役所の中にいろいろな団体が来て、いろいろな催しをするということか。
- お見合いのような、温かくていい種をもらって、持ち帰って花を咲かせるという場にできれば良い。私は介護のために帰郷していたが、地域の方が、いろいろな文化が残っていると感じた。その文化を、子どもの頃から伝えているのを目にした。
- 私も、市民活動フェスティバルという場は、ぜひ作っていただきたいと思っている。それを、7 月 7 日にするというアイディアは、とても面白い。
- 地域では、駅前や商店街のまつりに吸い取られるという意識がある。文化祭や産業まつりなどの日でも良いのではないか。
- 7 月 7 日は、覚えやすい。
- 茂原市の七夕まつりは、7 月 7 日ではなく、7 月の最終金・土・日曜日である。
- それは承知している。七夕まつりに関係なく、天の川で織姫と彦星が会うようなイメージで、誰かと誰かが会えるといいのではないかと思う。
- 先日、市民室で高野誠鮮さんの講演を聞いたが、みんなやる気があるが本気がないと言っていた。理念がないと育たないとも聞いたので、理念をきちんと立てて、本気がないと何事もうまくいかない。

- それでは、すぐに実行しよう（笑）。7月7日と決まれば、あとは団体や市側の準備を整えればいいだけである。
- それならば、今日来た甲斐があった（笑）。
- もし実施するとしたら、どんなイベントが良いか。
- 最初に理念をきちんとしなくてはならないのではないか。
- 高齢化社会に対応しなくてはならないから、健康づくりが一つの切り口である。
- 子どもたちに、茂原を好きになってもらいたいので、小さい頃からきっちり文化を教えないといけないと思う。私も余所から来たので歴史が分からないが、自分のまちを好きにならないと、このまちのために何かをしようという気にはならないのではないか。
- 市役所をメイン会場にして、茂原公園で桜まつりなど、いろいろな場所でそれぞれの取り組みがあればよいのではないか。
- そのように種が増えていくと良い。
- 具体的な内容はどんなものにすればよいか。
- 9階を会場にするという意見があったから、健康づくりのために9階まで上り下りすればよいのではないか（笑）。
- 七夕のまち茂原のテーマとして七夕を掲げるのは良いと思う。アドバイザーから地域通貨を作ったという事例の紹介があったが、マッチングのイベントを七夕に見立てて、団体を彦星として、お手伝いしたい織姫さんに来ていただき、マッチングがうまくいけばお星さまの通貨がもらえるなど、七夕のストーリーに乗せて、市民活動支援センターのデザインをすれば、茂原ならではのものになるのではないか。
- そのようなやわらかい仕組みであれば、子どもたちも参加しやすいと思う。
- 茂原市は七夕まつりをPRしようとしているので、良いと思う。あとは、内容をどうするか考えれば、すぐに実行が可能である。
- 織姫・彦星の出会いと言え、青春時代である（笑）。
- 元気な人が集まれば、どんどん元気になると思う。ボランティアをやっていて思うのは、高齢者は口を開けて待っているということ。落ちてくるのを待つのではなく、自分から出ていかななくてはならないが、そのためには、遠くではな

く、歩いていけるくらいの近くに場所がないといけない。

- 事業費は、あまりかからないのではないか。
- やる気と本気さえあればできる（笑）。
- アイディアとして出されていた、各ブースで発表するという仕組みがあると良い。できなければ、四街道市のような陳列棚から始めるなど。
- 最初は何でも手探りでやるしかない。
- 市役所中を各団体で埋め尽くすと、面白いと思う。市役所は大変だと思うが。
- 各課が何人獲得できたか競うと面白い。
- 冬の七夕まつりはいつか。
- 2月14日の近辺である。
- 1回目は、その日の近辺にしてはどうか。
- 各課に関係あることを取り上げて、役所の中で競わせるのはどうか。競わないと、人間は動かない。
- 何かやりたいが、実現の方法が分からない人が多いと思うので、市役所でやるのであれば、直接の担当課と話すことができると良いと思う。

【アドバイザーによる総括】

認定NPO法人ちば市民活動・市民事業

サポートクラブ代表 牧野 昌子氏

- 皆さん活発なご意見で、大変楽しく拝聴した。
- 1day センターというテーマで話し合われたが、七夕のストーリー設定という点でだいたい固まったのかなと思う。
- 開催の目的を、誰に来てほしいのか、誰を目当てにアピールするのかなど、明確にする必要がある。富里市でもやりたいことがたくさんある中で、「何のために」とか、「市のどの施策に結びつくのか」という企画書を作る練習ばかりを、半年くらいやっていた。
- 市民活動や団体支援から、事業支援、コレクティブ・インパクト※という段階に移ってきており、面として課題解決にあたるということで、その事業評価というのが問われるようになってきている。評価指標や成果など、従来のアウトプットだけでなく、アウトカムまで求められるような課題解決が必要である。そのような癖をつけていかななくてはならないと考えている。
- サポートセンターは全国でたくさんあるが、センターはその市のニーズに答えるものであり、一つとして同じものはない。NPO クラブが関わっている四街道市も富里市も、異なる活動をやっている。ぜひ、茂原らしいセンターにしていただければと思う。

※コレクティブ・インパクト…立場の異なる組織（行政、企業、NPO、財団、有志団体など）が、組織の壁を越えてお互いの強みを出し合い、社会的課題の解決を目指すアプローチのこと。

【検討委員会・ワークショップの様子】



茂原市社会福祉協議会地域福祉課 岩村副主査による茂原市ボランティアセンターについての説明



認定 NPO 法人ちば市民活動・市民事業クラブ 牧野代表による中間支援団体についての助言



フィッシュボウル形式によるワークショップの様子



とても和やかな雰囲気の中、対話が進められました。